

「戦争ポスター」を読み解き、「戦争ポスター」を作成・表現する歴史学習 ～ 教科間連携を視野に入れたアクティブな学び ～

東京学芸大学附属世田谷中学校 秋山 寿彦

1. 実施学年及び教科・領域

中学校第3学年社会科（歴史的分野）

2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

(1) 単元名 「軍国主義・ファシズムと日本・世界の行方」

(2) ねらい

① 学習指導要領との関連

次期学習指導要領にむけての動きが、加速する状況で、「21世紀型資質・能力」、「アクティブ・ラーニング」、「主体的で対話的な学び」、「深い学び（ディープラーニング）」がこれからの学習観・学力観のキーワードとなっている*1。

歴史学習においては、知識の習得・理解を中心とする学習から、生徒一人一人が、多様な資（史）料を読み解く活動を基盤として、時代の特色と人々の生活や意識の変化を多面的多角的にとらえ、たとえ拙くとも自分なりの歴史的な見方や考え方を形成・構築し、表現・発信していく学習へと転換していくことがもとめられる。

② 単元の目標

- i 1931年から1945年の戦争を、アジア及び世界的視野に立ってとらえ、戦争の名前を命名することができる。【知識理解・批判的思考判断表現】
 - ii 国立歴史民俗博物館（以下：歴博）の「戦争ポスター」や映像・写真・新聞記事などの戦時中の史料を活用して、戦争中の人々の生活や気持ち、国の政策・方針を「ポスター」として表現することができる。【資料活用の技能・調査・批判的思考判断表現】
 - iii 史料・歴博の「戦争ポスター」と作成した「創作戦争ポスター」を対比し、「プロパガンダ」・「総力戦」という概念を理解できる。【批判的思考判断表現・概念形成】
 - iv 「創作戦争ポスター」のプレゼンテーションを通して、1931年～1945年の戦争の特徴と意味を多面的多角的に理解できる。【コミュニケーション・関心意欲態度】
- ※ 評価の観点の【 】内には、学習指導要領で示される4観点とともに国際バカロレア（IBO）ミドルイヤーズプログラム（MYP）で設定される「個人と社会」の評価観点に取り入れられている調査（RESEACH）及びコミュニケーションを設定すると共に、思考については批判的思考（CRITICAL THINKING）とした。

*1 新井健一「学習観・学力観のパラダイムシフトは今なぜ必要なのか」、松下佳代「アクティブラーニングにどう向き合うか」「英語教育」2016年10月増刊号 大修館
松下佳代・高等教育研究開発推進センター〔編著〕「ディープ・アクティブラーニング」勁草書房 2015年

(3) 博物館との関連 ～中学校学習指導要領社会科歴史的分野とのつながりから～

- ① 活用方法 「非来館型活用」
- ② 活用資料 貸出教材・「戦争ポスター」

(4) 指導観

学習指導要領改訂の動向を踏まえ、これからの歴史学習で育成していくことをめざす生徒像^{*2}を7つの視点から設定し、本実践を試みた。

① 歴史学習の課題に「意欲的に挑戦できる生徒」【risk taker】

教師の説明・解説、教科書や資料集に「正解」をもとめるのではなく、解が一つに定まらない、あるいは、解のない複雑な課題に興味・関心を持って、学ぶことを楽しみながら向き合える生徒

② 歴史学習の課題を「自分の頭で考える生徒」【thinker】

歴史学習の課題を、過去を生きた当時の人々の思い・気持ちや立場に目をむけ、自分の生活や未来と結びつけて、広い視野に立って考えることができる生徒

③ 歴史学習の課題をもとにして「他者とコミュニケーションができる生徒」

【comunicator】

歴史学習の課題の解決を目指して、資（史）料を読む、見る、聴く活動や自分の考えを表現する活動を通して、他者との相互啓発・交流を図り、広く社会に向けて自分の思や意見を発信することができる生徒

④ 歴史学習の課題を「主体的に探究する生徒」【reseacher】

歴史学習の課題を「他人事」としてではなく、当事者の立場を意識し、「自分事」として受け止め、自分なりの「問い」を立てることを試み、調査活動を通して、学習の見通しを立てていくことができる生徒

⑤ 歴史学習のさまざまな場面で「心を開いて向き合うことができる生徒」【open mind】

他者との協同・共同・協働的な活動を通して、自分や他者が生きる社会や世界の違い、多様性に目をむけ、尊重することができる生徒

⑥ 歴史学習を「振り返ることができる生徒」【reflection】

歴史学習におけるさまざまな学びを振り返り、自分の学習の成果と課題を明確にとらえ、長期の時間軸のなかで時代と人々の生活の特色と変化に多角的にアプローチすることを試みる生徒

⑦ 歴史的な「知識のある生徒」【knowledgeable】

年代・人物・歴史的なできごとに関する個別的な知識を活用して、時代や人々の生活の特色と変化を、自分の言葉で表現・説明できる生徒

また、歴史学習における博物館との連携を図った指導を次のように整理することができる。

教科書と資料集を用いて、教師による説明と講義を中心にして展開され、知識を記憶す

*2 21世紀型教育の国際標準の一つのあり方とらえられている国際バカロレア機構（IBO）が、初等中等教育において育成することをめざす「10の学習者像」を参照して、設定した。

ることを重視する学習のあり方に対する授業及び学習活動の改善をすすめていくとき、歴博をはじめとして、博物館が展示、収蔵する実物資料、レプリカ、ジオラマ、映像、タブレット端末を用いた解説等の多様な資料は、本物が持つ強いインパクトと新鮮な驚きを生徒に与える。

原始古代から民俗を含め、近現代までの日本列島の歴史を包括的に6つの展示室により表す歴博は、学習指導要領社会科歴史的分野が示す「日本人の生活や生活に根ざした文化については、政治の動き、社会の動き、各地域の地理的条件、身近な地域の歴史とも関連づけて指導したり民俗学や考古学などの成果の活用や博物館、資料館などの施設を見学・調査したりするなどして具体的に学ぶ」*3 ことを具現化していることから極めて有効な施設である。近年、歴博では、手習いや和算をボランティアスタッフの指導により学ぶことができる寺子屋学習、学校の長期休業中を中心として設けられる弥生の衣服（貫頭着）着付け、ミニ銅鐸・銅鏡鑄造体験、戦国時代の兜製作等の体験型アクティビティーが取り入れられている。

これらは、学校及び生徒が歴博へ来館することを前提とするものであるが、学校の年間計画や歴博から遠隔の地域に位置するなどの理由から来館型学習が難しくとも、本実践の資料とした「戦争ポスター」をはじめとする「貸し出し教材」を活用することにより、生徒を主体とする「探究型」歴史学習を構築していく手がかりを得ることができる*4。

来館型・「貸し出し教材活用」という非来館型のいずれの博学連携の実践においても、歴史学習における生徒による表現活動、「学びに向かう力」(approaches to learning)と学習意欲を生み出す原動力の一つとなるコミュニケーション活動のあり方については、次期学習指導要領を視野にとらえたときに歴史学習における学習活動にとって本質的な課題となってくると考えられる*5。

非来館型・「貸し出し教材」活用型の歴史学習に取り組むとき、博物館と学校の連携のあり方ともに、歴史学習と他教科・総合的な学習・特別活動との連携及び、地理・公民的分野の連携のあり方＝つながりをキーワードして21世紀型の学習を構築していくことがこれからの新しい歴史学習にはもとめられる。*6

*3 中学校学習指導要領第2章第2節社会第2各分野の目標および内容〔歴史的分野〕3内容の取扱い(1)カ、また、藤野敦は、「中等教育資料」2016年12月号において、博物館における生徒の来館型学習と日常の歴史学習における調査活動をつながることにより、生徒の学習課題意識の高まりが期待できると述べている。同時に、博物館を訪れた生徒の中には、「立って教科書を読んだ気分」となったという感想を紹介している。

*4 博物館による学校への教材資料の貸し出しは、九州国立博物館、国立民族博物館等でも取り込まれ、博物館と学校の連携(以下:博学連携)がすすめられている。

*5 こうした課題意識に基づき、筆者は、平成24・25年度博学連携研究員会議実践報告において、中学生による歴博展示室紹介パンフレット作成とプレゼンテーション活動のあり方について取り上げた。

*6 平成20・21年度博学連携研究員会議実践報告書における郡司明子の「アートで「江戸図屏風」めぐり」は、教科間連携型(図画工作と社会)の先駆的実践事例といえる。また、「ホリスティックな学び」を重視する国際バカロレアでは、中等教育においても

「戦争ポスター」を活用した歴史学習においては、ポスターの制作・表現に取り組む美術科との連携とともに、1931（昭和6）年9月17日から1945（昭和20）年8月15日に及ぶ戦時下で当時の国民を鼓舞した「軍歌（歌謡曲）」を音声教材*7として活用することから音楽科との連携を図った。学習内容・教材の連携とともに、「プロパガンダ（政治的宣伝）」をキーコンセプトとして、歴史的思考力を中心とする「21世紀型資質能力」の育成をめざして、資（史）料を批判的に読解する力の育成と、戦争を現代の視点からだけでなく、生徒一人一人が、過去を生きた人々の思い・考え方・価値観に迫っていかうとする姿勢を育成することに焦点を当て、中学生の戦争認識を深める学習のあり方について美術科・音楽科、そして、国語科の教員・図書室司書とともに「戦争ポスター」*8を手がかりとする授業実践を試みた。

3. 指導計画

① 単元名：「1931（昭和6）年から1945（昭和20）年までの期間、日本や世界が戦い続けた戦争を、あなたはどのような名称で呼びますか？」

② 単元の学習内容と学習活動＜12時間扱い＞

	○学習内容及び学習活動	□指導上の留意点 ■評価の観点
第1次 ＜4時間 扱い＞	<p>○中国大陸へ侵（進）出を図る日本</p> <p>○張作霖爆死事件 満州事変、「満州国」建国、盧溝橋事件（日中戦争）を伝える当時の新聞を読み解き、中国大陸侵（進）出の実態をとらえる。</p> <p>○リットン調査団及び国際連盟脱退に関するニュース映像を視聴する。</p> <p>○CD：平井英子「守れよ満州」を聞き、「帝国の生命線」と位置づけられる「満州」へ数多くの開拓移民が渡ったことを知り、「満</p>	<p>■昭和初年の時期の日本と中国との関係を、当時発行された新聞から中国東北部（旧満州）に焦点当ててとらえることができたか。 <知></p> <p>□新聞記事の読み解きについては、事件発生年月日と事件の内容に目をむけることを助言する。 <知></p> <p>□歴史学習に音楽やポスターを</p>

教科間の連携を図った学習単元の設定をもとめている。

*7 「戦争ポスター」を分析する視点としては、田島奈都子著、「プロパガンダポスターに見る日本の戦争 135枚が映し出す真実」、勉強出版 2016年、「世界のグラフィックデザイン2 ポスター・歴史編」講談社 1974年

「軍歌（歌謡曲）」については、辻田真佐憲監修・解説 CD「日本の軍歌アーカイブス 4 銃後の歌 戦時下の少女歌謡 1929-1943」 JVC・ケンウッド・ビクターエンタテインメント 2015年

*8 「戦争ポスター」を活用した博学連携の実践事例としては、平成24・25年度博学連携研究員会議報告書に、中澤則明による栄養教諭及び地域の戦争体験者をゲストティーチャーとしてむかえた小学校における体験型学習、平成22・23年度博学連携研究員会議報告書では、浅野伸一による高校生による「戦争ポスター」の読解に焦点を当てた実践が報告されている。

	<p>州」に対する関心を持つことができる。</p> <p>○昭和初期の日本国内の政治と経済を昭和恐慌、5・15事件、2・26事件から理解する。</p>	<p>資料として用いることを知らせる。</p> <p>■「守れよ満州」の歌詞を配布から、当時「満州」という地域が持った意味を理解できたか。</p> <p style="text-align: right;">< 関 ></p>
<p>第2次 < 3時間 扱い ></p>	<p>○世界恐慌に対する欧米諸国の対応</p> <p>○アメリカ合衆国のニューディール政策、スターリンによる旧ソ連の「経済発展」、ベルサイユ体制下で経済が破綻したドイツにおけるヒトラーへの期待とナチスの台頭、ファシズム政党を映像資料とポスターから読み解くことができる。</p>	<p>■映像やポスターを見て、気づいたことから、映像やポスターのメッセージが国や政治体制の違いにかかわらず、政治宣伝（「プロパガンダ」）を中心的な目的として作成されたことを理解できたか。</p> <p style="text-align: right;">< 思 ></p>
<p>第3次 < 2時間 扱い ></p>	<p>○戦争への道を歩む日本</p> <p>○歴博の「戦争ポスター」を鑑賞して、気になるポスターを2つ程度選び、その理由を書く。</p> <p>○各自が、「戦争ポスター」を鑑賞して気がついたこと、わからなかったことを4人のグループで出し合う。</p> <p>○ポスターに描かれている女性や少年の姿が表すものを話し合う。</p> <p>○台湾・シンガポール・フィリピン（比島）に注目して「大東亜戦争」という戦争の呼び方の意味を考える</p> <p>○戦争の経過からポスターの作成時期を年代順にグルーピングすることを試みる。</p>	<p>□社会科教室をギャラリーに見立て、美術館鑑賞で取り込まれている「対話型鑑賞」を生徒に促す。BGMとして、「紀元2600年」、「シンガポールが陥ちました」を流す。</p> <p>□旧字体で読みにくい漢字、右から読みのタイトルについては補足説明する。</p> <p>■戦争への協力と参加を呼びかけるポスターの特色を、【国債の購入や貯蓄】【資源・エネルギーの節約】【年少兵士の募集】【戦時下の国民生活】【戦意昂揚】の5つの点から分類することができたか。</p> <p style="text-align: right;">< 思 ></p>
<p>第4次 < 3時間 扱い ></p>	<p>○1931（昭和6）年から1945（昭和20）年という戦争の時代を生き抜いた人々の立場に立って「戦争ポスター」を作成する。</p> <p>○「戦争ポスター」作成した意図を3分程度でプレゼンテーションする。</p>	<p>■歴博のポスター及び学習資料として配付したアメリカ・ドイツなどのポスターを参考としてA4版カラーで「戦争ポスター」を作成することができたか。</p> <p style="text-align: right;">< 技 ></p>

③ 本時：『「創作戦争ポスター」を活用して、1931（昭和6）年～1945（昭和20）年』

- i 1931（昭和6）年から1945（昭和20）年の戦争を、アジア及び世界的視野に立ってとらえ、戦争の名前を命名することができる。【知識理解・批判的思考・判断】

ii 国立歴史民俗博物館の「戦争ポスター」や映像・写真・新聞記事などの戦時中の史料を活用して、戦争中の人々の生活や気持ち、国の政策・方針を「ポスターとして表現することができる。【資料活用の技能・調査・表現】

iii 史料・国立歴史民俗博物館の「戦争ポスター」と作成した「創作戦争ポスター」を対比し、「プロパガンダ」・「総力戦」という概念を理解することができる。
【批判的思考・判断】

iv 「創作戦争ポスター」のプレゼンテーションを通して、1931（昭和6）年～1945（昭和20）年の戦争の特徴と意味を多面的多角的に理解することができる。
【コミュニケーション・関心意欲態度】

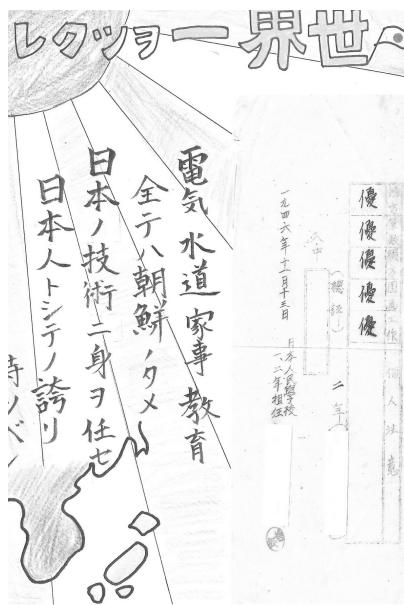
④ 本時の展開

	学習内容及び学習活動	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入 10分	<ul style="list-style-type: none">○「創作戦争ポスター」を作成するときに、歴博の「戦争ポスター」を参考としたか確認する。○武蔵村山市の少年飛行兵学校跡地に建設される歴史資料館を紹介した新聞記事と生徒の祖父が戦争中に拾った伝単を紹介する。○陸軍省作成の「戦争遺族家庭風景」を見て、作成意図を話し合う。	<ul style="list-style-type: none">□教室の壁面に史料・歴博「戦争ポスター」を掲示する。 <関>□2016（平成28）年9月24日毎日新聞（朝刊）、朝日新聞（夕刊）を資料として提示する。 <技>■伝単が日本の降伏を呼びかけるための政治宣伝（プロパガンダ）であることを理解できる。
展開 30分	<ul style="list-style-type: none">○「創作戦争ポスター」プレゼンテーションを始める。○ポスターの作成、題材の選定にあたって、最も影響を与えた歴史的事実を説明する。○作成したポスターが1931（昭和6）年から1945（昭和20）年のどの時期を表したものであるか説明する。 世界恐慌～満州事変 ヒトラーの台頭～日中戦争（盧溝橋事件） 第2次世界大戦の勃発～太平洋戦争○戦争当時の時代を生きる人々の生活や戦争に対する意識、立場、当時の日本が戦争に臨む姿勢を作成したポスターに基づき説明する。○1931（昭和6）年から1945（昭和20）年の戦争をどのような名称で呼ぶかを考え、ワークシートに記入する。	<ul style="list-style-type: none">□4人で1組のグループを編成し、発表・司会・記録・報告の担当を決め、1人、3分～5分のプレゼンテーションに取り組む。□「創作戦争ポスター」提示用ボード、感想記入用紙を配布する。■「創作戦争ポスター」に関する発表を聞き、戦争に関する新たな気づきや感想を記述することができたか<関・思>・各グループでのプレゼンテーションと質疑応答の状況を机間指導する。特に、作成した「創作戦争ポスター」と教科書や資料集で述べられている戦

		争に関する歴史的事実との対応関係を捉えることができたか。 ＜思・判＞
まとめ	○プレゼンテーションを聞き、気がついたこと疑問に感じたこと、感想や意見を交換し、記録用紙に記入する	□ポスターを作成する歴史学習の意味を考え、新聞への意見発信を助言する。 ＜思＞
<p>■ i ポスターの作成を通して、戦争当時の人々の思い・考え方・価値観や社会の姿に迫ることができ、「プロパガンダ（政治宣伝）」という概念をとらえることができたか。</p> <p>ii 戦争の呼称を定めることにより、1931（昭和6）年から1945（昭和20）年の日本と世界の動きと結びつきを多面的多角的にとらえることができたか。</p> <p>iii 作成したポスターのプレゼンテーションと質疑応答を通して、1931（昭和6）年から1945（昭和20）年の戦争に対する多様な見方と考え方を獲得することができたか。</p>		

4 実践の概要

本実践は、2016（平成28年）年9月27日（火）に、東京学芸大学附属世田谷中学校の第3学年の4学級、159名（男子80名、女子79名）を対象として実践したものである。歴博の「貸し出し教材」、「戦争ポスター」を資（史）料として、生徒が作成した下の「創作戦争ポスター」作品と1931（昭和6）年～1945（昭和20）年の戦争をどのように呼ぶかの2点から本時の実践を振り返る。



【作品A】

作品Aを描いた生徒（K・H）は、曾祖父が、エンジニアとして日本植民地下の朝鮮半島北部にいたことを祖母から聞き取り（＝調査活動）、このポスターを作成した。ポスター右下は、敗戦後の1946（昭和21）年に日本人民族学校2年生であった祖母の通信簿を貼り付けたものである。曾祖父や祖母は、「アジア」といわれるほどの工場勤務の技術者一家であったが、プレゼンテーションでは、一家の身近にいた朝鮮人の存在とその生活環境に目をむけ、「日本の技術は、表向きは朝鮮のためとっていますが、やはり、すべては日本のために動いていました。朝鮮人の家は、質素なものでした。長いつきあいのある親しい朝鮮人でも、祖母の家にこっそりと会いに来て、堂々とは会えなかったそうです。終戦によって立場がきっぱりと入れ替わってしまった。」ということ

を知り、日本による朝鮮半島の植民地化の実態を感じ取るとともに、戦争は一時的なものではなく、支配される側にとっては長い時間だったという経過に基づき、「私はこの戦争を『15年戦争』と呼びます」という結論に到達した。戦争の学習において、自分の家族の歴史に着目したことから、朝鮮半島における人々の生活と当時の日本の「プロパガンダ」の表裏の関係に迫ろうとした点がポスターとプレゼンテーションに表現されている。



【作品B】

作品Bを描いた生徒（S・A）はポスターに「孤立していた日本」という題名をつけ、明治時代の日清日露戦争を近代日本の戦争の起点としてとらえ、第1次世界大戦まで勝利を続けながら、1933（昭和8）年に国際連盟を脱退し、世界の中で孤立を深めていく日本を表そうとした。「想像してみてください。今日の日本が国際社会で孤立してしまいアメリカをはじめとする国々と戦争をすることになったらどうなるでしょうか。しかし、75年前の日本人は違いました。多くの人が戦争に勝とうと考えていたのです。その根底には、列強の仲間入りを果たした“一等国”意識があったのだと思います。・・・この戦争で多くの人々が犠牲になりました。戦火は、アジア太平洋に広がりました。このことから、私は、『アジア太平洋戦争』と戦争を呼ぶことにしました。」



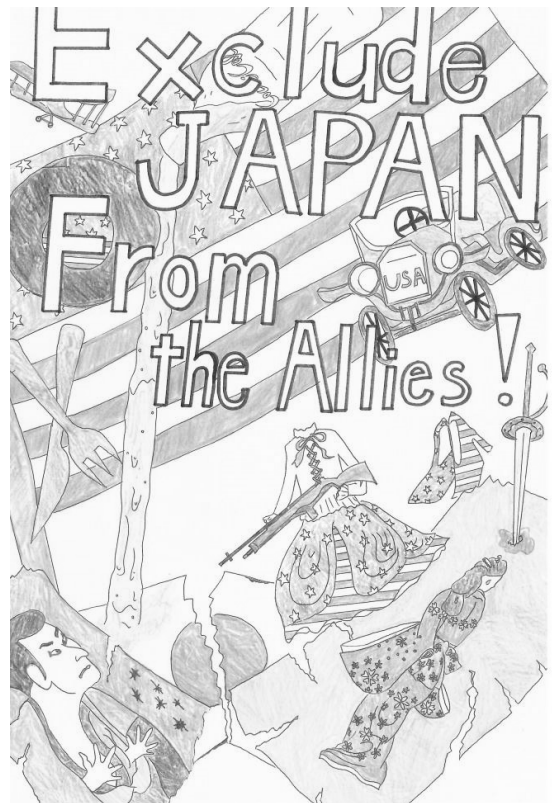
【作品C】

指摘は、2016年に国際連合が「だれも置き去りにしない」ということを基本理念として、これから先進国も発展途上国も共にめざしていく「持続可能な発展目標」の設定に照らして、注目すべき発想といえる。

作品Dを描いた生徒（K・S）は、1930年代初頭にアメリカ合衆国で作成されたコカコーラ社及びレコード宣伝ポスターからアイディアを得て、経済封鎖から展開される「連合国から日本を排除

作品Cを描いた生徒（M・R）は、ポスターに「お国のために」という題名をつけ、「私は、1931年から1945年にかけての戦争を日本国民の貧困という視点からポスターを作成した。」と述べる。日本の勝利のために、国民のできる限りを越える負担と節約をもとめたこの戦争を、M・Rは、「我慢の戦争」あるいは、戦争当時は敵性語であった英語をあえて用いて、

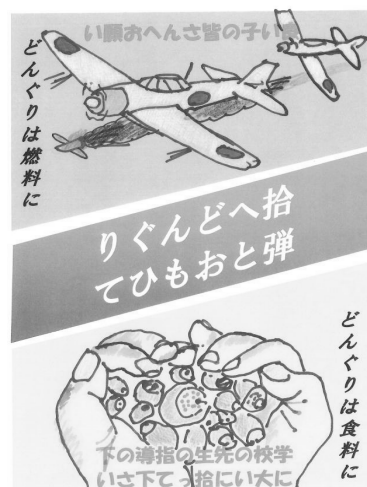
「NOT SUSTAINABLE WAR」と名付けた。戦争こそが「持続可能性」の対極に位置するとの



【作品D】

する」ということをモチーフとする世界史的視点に立つ作品を描いた。そして、「私は、このポスターの題材とした戦争を『第2次世界大戦』と呼びます。教科書に出てくるごく普通のそのままの名前ですが、この戦争は、結局、世界中の国々がさまざまな立場で関わった戦争ということができます。『太平洋戦争』では、太平洋に面した地域だけのように思われます。また、『大東亜戦争』という名前では、日本を中心とした呼び方となっています。たくさんの国の思惑と利害が複雑に絡みあった戦争であったからこそ『世界大戦』という呼び方がふさわしいと思います。」

作品Eを描いた生徒（K・N）は、歴博史料の「戦争ポスター」で、戦闘機の燃料として原油・ガソリンの輸入がインドネシアをはじめとする「南方」地域から途絶え始めることともなあって、松の根から油を抽出することを奨励するポスターを見て、2014年3月に地域の公民館が主催した「平和フェスティバル」に参加し、郷土史家・古橋研一氏の講演「ドングリから見る戦争」を思い起こし、このポスターを作成した。渋谷区広尾に住む93才の筆者の父親に、K・Rが作成したこのポスターを見せたところ、広尾の商店街の中心に位置する祥雲寺の広大な庭で、ドングリの実を、臨川小学校の子どもたちが、教師に引率されて拾っていたという話を聞いた。ドングリに注目し、身近な地域から戦争をとらえるという視点の斬新さと小学校における歴史学習での体験をポスターに表現した点を評価したい。



【作品E】

5. 成果と課題

「戦争ポスター」を読み解き、創作する本実践の学習のまとめの学習活動として取り組んだ新聞各紙への生徒による意見発信と寄せられた反響投書を成果と課題としたい。

(1) 新聞投書から読み取れる博学連携研究の成果

i 2016（平成28）年10月12日・東京新聞

「戦中の雰囲気 授業で感じた」

歴史の授業で、昔の音楽を聴きながら戦争のポスターを鑑賞しました。教室の壁に当時のポスターをいくつも貼って、気づいたことや感じたことを出し合いました。その後、自分たちでポスターを作成しました。

このような授業は初めてでとても驚きましたが、a ポスターは当時の人が作ったものなので様子をうかがい知ることができ、自らがポスターを作成することはさらに学習を深めました。

授業といえば、教科書に沿って板書するという光景が思い浮かびますが、戦争を経験した世代が少なくなっている今、当時の雰囲気を感しながら学習することはとても良いことだと思います。毎回ではなくても、たまにはこんな授業で学びを深めるのも良いのではないのでしょうか。

ii 2016（平成28）年11月4日・毎日新聞

「歴史学習の意味を考えた」

先日、学校の歴史学習で日中戦争や太平洋戦争中のポスターを作り戦時中の政府や国民の思いを考えた。

最初は受験生の自分たちにそのような授業は必要なのか、必要なのは歴史の知識を詰め込む授業ではないか、と考えた。しかし、b そもそも歴史の授業を受ける意味は過去の過ちを繰り返さないようにするためだと考えられる。実際、無理やり詰め込んだ知識なんて1ヶ月で半分ぐらい忘れてしまう。そんな授業が何の役に立つのだろうか。

自分たちに必要なのは、年号や出来事を覚えるだけの授業ではなく、その時代に生きた人の考えや思い、時代背景を理解することだと思う。過去の悲惨な出来事を繰り返さないために c 必要なのは「1941年に太平洋戦争が開戦」と覚えることなのか。それとも「太平洋戦争中に生きた人はどのような気持ちだったのか、どのような生活をしていたのか」と考えることなのか。

iii 2016（平成28）年11月9日・読売新聞

「戦争学び 平和知る」

歴史の授業で戦争に関するポスターを作りました。昭和時代のポスターを見て、軍歌も聞きました。少々やり過ぎではと思う人もいるでしょう。しかし、d 私は絵が得意なので楽しかったし、歴史的な出来事を調べた結果、教科書で習うより、深い知識を得ることができました。

大人たちは、戦争というと、子どもを遠ざけようとする傾向があるように思いますでも、こうした授業を通じて平和とは何かを感じる事が大切だと思います。「戦争はいけない」と繰り返すより、意味があると思います。

iv 2016（平成28）年11月10日・神奈川新聞

「ポスター作りで戦争学ぶ」

先日、私の学校では、ある特殊な歴史の授業をしました。それは「戦争ポスター」を使った授業です。戦争当時、日本の至る所に貼られた戦争ポスターですが、1931（昭和6）～1945（昭和20）年の間、e 日本に張られていたのではないかというポスターを想像して、1人1枚作りました。

私は満州事変のために旧満州（中国東北部）へ移住した人々に注目したポスターを作りました。作る上で、満州についてたくさんを知ることができました。

ポスター作りの後は、小さなグループでディスカッションしました。自作のポスターについて自分の言葉で説明することで理解が深められたところもありました。また、自分とはまったく違う時代や着眼点で作られた他の人たちの発表を聞いてとても面白かったし、戦時中の日本の様子についても詳しく学習することができました。

f こうした学習で歴史についてはもちろん、発表する力や聞く力も高めることができました。自分たちで作りあげる授業を今後も続けていきたと私は思っています。

歴史の授業で戦争ポスター作りをした、という投稿文を読んだ。中学生のM・Aさんは、満州事変に関するポスターを作ったという。クラスの皆さんは、終戦までのいずれかの時期を捉えて、個々のポスターを作ったそうだ。ポスターを作る前段の学習には、非常な努力を要したと思われる。終戦までの約15年間でどのように勉強し、日本がたどった道を、この中学生の皆さんはどう捉えたのか。多くを学んだに違いない。加えて、すごい教師がいることに感心した。どんなポスターを準備し、どう授業を展開したのだろうか。

ポスター作りの後、小グループでディスカッションをしたという。生徒の皆さんがいきいきと学習に参加している姿が、目に見えるようだ。 g 主体的に学ぶとはこういうことであろうか。

歴史学習の主要なねらいとされる時代を生きた人々の気持ちや思いに迫り、時代の特色を理解するという歴史の内在的理解を深めていく史料として、「戦争ポスター」が表わしている時代を動かす「プロパガンダ（政治宣伝）」が生徒に与えるメッセージは、非常に明確でわかりやすいものであった。同時に、生徒は、そうしたメッセージを手がかりとしつつ、その背景に潜む当時の人々の生活や気持ちに多面的多角的にアプローチしていくことができた。とりわけ、ポスター作成の学習活動を通して、身近な人への聞き取り調査をはじめとした調査活動やこれまでの戦争に関する学習経験を振り返ることにより、戦争の時代を想像的・創造的に描こうという意欲の高まりが、上の下線部 a、e の記述を典型として見られた。

また、下線部 b、c に見られるように、「戦争ポスター」の作成とそのプレゼンテーション活動を設定した学習から歴史を学ぶ意味を問い、歴史の学びのあり方そのものに向き合う姿勢が顕在化した。

下線部 d に代表される記述から、文書を読み解く学習活動からポスター（絵画）や音楽等の異なる教科を視野に捉えた多様な資料を活用することによって、歴史に対する生徒の興味関心を掘り起こす可能性が浮かび上がってきた。同時に、次期学習指導要領でもとめられる「深い学び」のあり方に迫ることができた。

「アクティブラーニング」の重要性が広く提唱され、アクティブな学習活動を授業に取り入れていくことが目的化され、歴史認識の質をどのように担保するかということがともすると明確ではなくなっている現状の中で、表現力と発進力とともに聞く力、ポスターや絵画など「非連続型テキスト」に対する読解力との育成に本実践を通して取り組み、戦争の時代を生徒一人一人が多面的多角的に探究し、「戦争ポスター」の作成の活動により批判的思考力を高めていくことができた。

「戦争ポスター」を作成する際には、国威発揚・戦意昂揚・戦争協力のプロパガンダという立場性と同時に、戦争に反対する立場からのアプローチを明確にできていない点が本実践の課題としてあげられる。このことから、当時の人々が戦争にどのように関わっていたのかという「コミットメント」を、生徒が十分には意識できない課題が残された。

（2）近現代の戦争を主題とする学習に関する博学連携研究の課題

1931（昭和 6）年から 1945（昭和 20）年にかけて日本がアジアの国々やアメリカ合衆国・イギリス・オランダと戦った戦争を直接体験した世代は、高齢化し、社会科学学習で行わ

れてきた「戦争体験者への聞き取り（インタビュー）活動」*9を継続していくことが難しくなりつつある。戦争についての学習では、歴博へ来館し、第5展示室で、佐倉連隊に焦点を当てた軍隊と兵士の「リアル」な生活を、38式歩兵銃を手にしてその重さ、兵舎のベッドの狭さ、当時の農村で生活していた青年が十分に食べるができなかった「充実」した食事という点から実感として理解することに大きな意味がある。

同時に、世田谷区三宿に2015（平成27）年に開館した世田谷区立平和資料館、川崎市平和館、明治大学平和教育研究所資料館をはじめとする地域の資料館、忠魂碑や寺院の墓石調べによる戦争犠牲者調査等の多様なフィールドワーク・調査活動を取り入れ、歴史学習の活性化を図っていくことのための太い柱であり続ける歴博の展示の更なる充実とAI・IOT時代の到来に即した新たな活動に期待したい。

戦争こそが最大で、最悪の人権侵害をもたらし、ひとたび戦争に巻き込まれるならば、私たちが今、当たり前のもと考えている日常生活は一瞬にして失われ、持続可能な発展が途絶えてしまうことをこれまでの歴史が示している。グローバル社会が生み出した「奇貨」ともいえる多様性や異質性に対する「分断と排除」の動きが顕在化している今日だからこそ、歴史を頭で理解することにとどめるのではなく、生徒と教師、歴史・民俗研究者が共に自分の目で見て、手で触れ、足で歩き、言葉を交わし、自分の皮膚感覚として捉えられるような博物館での学習のあり方を考えなくてはならない。博学連携研究のネットワークの知恵を活かし、21世紀の市民にもとめられる資質能力を育成していく視点からこれからの歴博活用のあり方を工夫していきたい。

*9 こうした先駆的調査活動としては、平成22年度から博学連携研究にともに取り組んできた神山知徳による戦争体験者への聞き取りを昭和学院の中学生がレポートにまとめた優れた実践、「祖父母が今に伝える戦争と昭和の記憶」を挙げる事ができる、筆者は、神山実践に触発され、埼玉県朝霞市・港区麻布のアメリカ軍施設を対象とする生徒による祖父母の戦争体験や身近な地域に残る戦争遺跡及び戦時下の回覧板の役割や町内会活動に関する聞き取り調査活動に取り組み、板橋区教育委員会主催、櫻井徳太郎賞への応募を中心として、生徒の学びの成果の発信をすすめている。